<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>石部 元雄・伊藤 隆二・中野 善達</td>
</tr>
<tr>
<td>著者別名</td>
<td>筑波大学リハビリテーション研究</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>筑波大学リハビリテーション研究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1995-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/2241/10904">http://hdl.handle.net/2241/10904</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
【ライブラリー】

ハンディキャップ教育・福祉事典

石部元雄・伊藤隆二・中野善達・水野悌一編

福村出版

1994年9月刊　A5判・上製函入/1024

第1章　発達と教育・指導・生涯学習

第2章　視覚ハンディキャップと教育・指導・生涯学習

第3章　聴覚ハンディキャップと教育・指導・生涯学習

第4章　言語ハンディキャップと教育・指導・生涯学習

第5章　知能ハンディキャップと教育・指導・生涯学習

第6章　学習ハンディキャップと教育・指導・生涯学習

第7章　運動ハンディキャップと教育・指導・生涯学習

第8章　行動ハンディキャップと教育・指導・生涯学習

第9章　病弱・身体虚弱と教育・指導・生涯学習

第10章　てんかんと教育・指導・生涯学習

第11章　ハンディキャップと教育・指導・生涯学習の評価

第12章　自立と生活・福祉・文化

第13章　ハンディキャップの自立と生きがい

第14章　ハンディキャップと生活・福祉・文化

第15章　ハンディキャップと福祉サービス

第16章　ハンディキャップと生活相談

第17章　ハンディキャップと運動・スポーツ・リクリエーション

第18章　ハンディキャップと生活相談

第19章　ハンディキャップと生活相談

第20章　ハンディキャップと法律

第21章　ハンディキャップと社会

事典類を選ぶ側にとって、考えてしまうことがいくつかある。知りたい情報がどれだけ収められているか、他の事典にない部分は何かだろうか。少なくともいくつかは役立つものであってほしい。そんな期待と不安がある。事典を編纂する側にとっては、同じようなことがいえる。おそらく完全な事典（辞典）というものは存在しない。できることは可能な限りの情報を集め、他と無縁を画す特色を創り出すことだろう。本事典の場合、そうした条件を意識してつくられたものに思う。とりわけ表題にその特色・方向性があらわれている。

表題にいかむ「障害」ということばを避けた理由についてて、この概念が不明確であるうえに、「障害児」「障害者」は「障害物」と混同され、「覚醒なもの」とか「排除されるべきもの」と誤解されているから」とある。用語をめぐる問題はとくに対象である人を表現する場合に問題となりやすい。養老哲司氏の「人間の違い」の表現を借りれば、一人称的「障害」は別として、問題は二人称の「障害」として三人称の「障害」を用いる場合だろう。三人称表現を用いても、意味する内容は多分に二人称的に行うものであることが多い。距離感なたろうか。表現としての尊重と内容としての理解、理解を超えた表現は関わりのないものとして遠ざかることになるだろう。

仮に「ハンディキャップ」にかかわる情報を人対社会といった図式により分けるならば、本事典の1巻はハンディキャップを負う人びとについての一次的情報を、2巻はハンディキャップをとりまく二次的情報をとりあげた構成といえる。

1巻の特色は「視覚」から「てんかん」にいたるハンディキャップの9分類に、乳児期から老年期までのライフステージという軸を新たな視点に加えた点だ。これまでに見なかったこと、明らかではないが可能性としていること等について解説している。2巻では社会の自立のために必要となる障害児や、支援事項を可能な限りとりあげている。これまで整理した形でしかも収集できなかった関連情報をハンディキャップを中心にまとめている欧米諸国との比較において、わが国の現状が明らかにされ、具体的に何か課題なのかがわかる。」

（東京成徳大学 佐藤至美）